

被爆体験

梶矢 文昭さんの伝承講話

資料館では  
「言っていない」  
第12期生 大石 秀邦

私は被爆体験伝承者の大石秀邦と申します。講話は約<sup>45</sup>50分、残りの10分で皆さんからの質問や感想にお応えできればと思います。本日は次のような流れでお話をさせていただきます。どうぞよろしくお願ひします。  
さく裂、もしくは炸裂

これは(1945年8月6日午前8時15分<sup>秒</sup>)、広島に原子爆弾が投下された日付と時刻です。私たちの人生には、後から考えてみれば偶然だったり、運命的であったりする出来事がつきものかもしれません。投下から43秒後にさく炸をしたとされる原爆ですが、(見捨てがちな1分間にも一秒を積み重ねた60秒という時間が存在し、)そのわずか数秒の差が生死を左右したという事実もお話しをさせていただきたいと思ひます。分を「見捨てがら」というのは個人の感覚で可し、(分=60秒)は周知の事実なので、不要な表現で可ないのでは?

まずは「原子爆弾の脅威と被害の概要」についてです。今から(79)年前の1945年8月6日、現在のJR芸備線矢賀駅の上空約9,600メートルを飛行する爆撃機B29(通称:エノラ・ゲイ号)から投下された一発の原子爆弾(通称:リトルボーイ)は、広島市の中心部、現在の島内科医院の上空600メートルでさく裂しました。  
地図を使って読めば、わりと広いので、(770)

中国山地に源を発する太田川下流域のデルタ(三角州)上に形成された広島市は、扇頂部(平野部への出口)付近の西と東に小高い山が、南の扇端部には河口そして瀬戸内海が広がっています。市中心部から半径約3キロメートルの範囲内に建物の85パーセントが収まるという特徴を持っていました。それは、(原子爆弾の開発に莫大な予算と人員を費やしたアメリカ合衆国にとって)世界で初めて投下される原爆の破壊力(エネルギー)や効果を測るうえで、広島市の地理が適していたと考えられています。また、1894年の日清戦争を契機に「軍都」として発展した広島(廣島)には、軍事関連の施設が多く、原子爆弾投下前まで大規模な空襲を受けていなかったこと、そして、連合国の捕虜収容施設がなかったことなども、最終的に広島が第1投下目標となった理由とされています。この部分は、アメリカが原爆を使用した理由(は)ありますが、「広島に投下した理由」とは少し異なるので、

1945年当時の広島市の居住人口は28~29万人で、その他、周辺郡部からの通勤者、建物疎開等の勤労作業に動員された大人や学生、また軍需工場などに徴用された朝鮮人労働者。さらに、軍人や軍関係者、留学生や捕虜などを合わせると、原爆投下時の広島市内の人口は約35万人前後であったと推計されています。

運命の8月6日、原爆が投下される午前8時15分までを振り返ってみましょう。原子爆弾(リトルボーイ)を搭載したエノラ・ゲイ号が科学観測機と写真撮影機を伴い、ミクロネシアのテニアン島の基地を離陸したのは日本時間の午前1時45分でした。それに先立って九州の豊後水道方面から、米軍の気象観測機三機のうち一機が広島より約2740kmの

人口ではない。太平洋の。「豊後水道方面から」の出典は?

などはい

ひや広島に  
原爆が投下  
されたのは  
など  
この層の文を  
入れ

出典は？

広島の上空へ飛来したため、午前7時9分に警戒警報が発令されました。「広島  
の天候は良好で爆撃可能」とエノラ・ゲイ号に伝えた気象観測機はそのまま広島上空から  
飛び去り、午前7時31分に警戒警報は解除。無警戒に近い日常の生活が始まりました。  
その後、午前8時6分に福山市上空、そして8時15分には東広島市上空を  
越えて西へと進む、エノラ・ゲイ号を含んだ大型機3機が発見されていました。しか  
し、市民への警戒警報の発令には至らず、世界初の原子爆弾は、広島市中心部に向け  
て投下され、その43秒後にさく裂したのです。

広島に投下された原爆は、ウラン235の原子核が連鎖的に分裂をするときに発生す  
る巨大なエネルギーを利用したもので、爆発に伴って放出された「熱線」「爆風」そし  
て「放射線」が複雑に作用し、人体や構造物に大きな被害をもたらしました。市街地  
のほぼ中央部上空で爆発したため、被害は同心円状に全市に広がりました。爆心地か  
ら半径2キロメートル以内の建物はことごとく倒壊・焼失、そして1945年12月まで  
には約14万人（誤差±1万人）の人々が原爆を原因として亡くなったと推計されて  
います。

原爆のさく裂によって放出された「熱線」「爆風」「放射線」の威力について、順に  
見ていきましょう。

まずは「熱線」です。原子爆弾のさく裂によって生じた「火の球」の表面温度は、  
約0.2秒後にセ氏7,700度に達したと推定されています。ちなみに太陽の表面温度は  
約6,000度で、地球から約1億5,000キロメートルも離れた遙かかなたから光（電磁  
波）を降り注いでいます。かたや、原子爆弾は地上わずか600メートルの上空から可  
視光線、赤外線、紫外線などの熱線（輻射熱）を地表に降り注ぎました。熱線を浴び  
た爆心地周辺の地表面の温度は3,000から4,000度に達したといわれており、爆心地  
から1.2キロメートル以内で、さえぎるものがないまま熱線を直接受けた人は身体の  
内部組織にまで大きな障害を負い、そのほとんどが即死または数日以内に亡くなりま  
した。また、爆心地から半径3.5キロメートルまでの地域にいた人も火傷を負いまし  
た。鉄の溶け始める温度は約1,500度といわれており、原子爆弾が放出した熱線のす  
さまじさがわかります。

次に「爆風」です。原子爆弾は空中でさく裂した直後に高温・高圧の空気の壁とい  
える「衝撃波」を発生させました。その「衝撃波」の後ろから吹き抜ける爆風の風速  
は爆心地から100メートルの場所で毎秒280メートル（ちなみに新幹線の秒速は約  
70m）、その圧力は爆心地から500メートルのところでは1平方メートルあたり約11  
トンに達したといわれています。爆風で吹き飛ばされた人、倒壊した建物の下敷きに  
なって圧死した人、下敷きのまま火災で焼け死んだ人も多くいました。また、割れて  
飛び散ったガラス片などで傷つき、大きな破片によって血管や神経を損傷することも

出典は？  
またこの部分  
X-31にこの  
割れても  
よいのでは

爆心地から1km以内の人が浴びた放射線量について述べるより、浴びた結果、人々がどうなったか(どんな症状が出たか)を述べた方がよいのでは。

ありました。原子爆弾が放出した総エネルギーを100%とすると「爆風」はその半分の約50%と言われており、その影響力の大きさが伺えます。

そして、火薬を使った爆弾と原子爆弾の決定的な違いが「放射線」の放出です。さく裂から1分以内に放出された放射線を「初期放射線」とよび、そのうち中性子線とガンマ線が地上に到達し、直接、人体に大きな影響を及ぼしました。また、放射線を浴びた土壤や金属はそれ自体が放射性物質となり、巻き上げられたチリやススなどとともに放射線を放出しました。放射線は人間の細胞や臓器に様々な影響を及ぼすと考えられていますが、爆心地から1キロメートルで、さえぎるものがないまま原子爆弾の初期放射線を浴びた人の放射線量は、ガンマ線だけでも4,220ミリシーベルトに達したと推測されています。4,000ミリシーベルトの放射線を浴びた場合の死亡率は50パーセントといわれています。ちなみに私たちが1年間に浴びる自然放射線は、平均で2.1ミリシーベルト(環境省HP)といわれており、核分裂から原子爆弾のさく裂によって放出される放射線量がいかに大きいかがわかります。

こんな詳しくくわらする印

被爆直後から短期間のうちにあらわれた「熱線」「爆風」「放射線」などを原因とする一連の症状を「急性障害」といい、外傷や火傷以外に発熱・吐き気・下痢・出血・脱毛など様々な症状を示しました。「急性障害」はその年の12月末までにほぼ終息をしましたが、「放射線」による影響はその後も長期にわたって様々な障害を引き起こし、被爆者にとってその危険性は現在も続いています。2歳の時に被爆した佐々木偵子さんと「折り鶴」の実話については皆さんもご存知だと思いますが、偵子さんは、被爆から9年後にあたる12歳(小学校6年生)の時に急性骨髄性白血病を発症。「折り鶴」へ託した願いもむなしくその翌年の1955年に亡くなりました。

頑

私たちが日常生活で体験できるレベルをはるかに超え、想像すら困難な原子爆弾の脅威の一端についてお伝えしましたが、今から(79)年前それは確かに存在しました。

警戒警報が解除され、広島市内において約35万人の普段の生活が始まって間もなく、世界初の原子爆弾のさく裂によって発生した巨大な「きのこ雲」の下、生き延びることができた人々、また、残留放射線の影響が残る中、焦土と化した広島市内に捜索や救援で入った多くの人々は、その時に何を体験し、何を思い、そして何を考えたのでしょうか。今日はそのお一人である梶矢文昭さんの被爆体験についてお伝えしたいと思います。

生き延びた人々  
に於ける  
修飾が  
(m)、何が  
言いたいの  
不明

この後の話と区別するために、不要では。

梶矢さんは現在、(広島市の北西部に広がる安佐南区にお住まいで)、1939(昭和14)年3月生まれの(85)歳。被爆当時は6歳で、現在のマツダスタジアムに近い荒神町国民学校の1年生でした。ご両親そして二歳上の姉らとともに広島駅の近くで暮らしていました。当時、都市部の小学生は、防空態勢の強化や空襲から若い生命を守ることを目的に、3年生から6年生の児童をより安全な地域に一時的に移住をさせました。

正しいですが、聴き手には何を意味するのかわからない。



縁故疎開の  
説明も必要

中学校や女学校 注、 8200

集団

これを「学童疎開」とよんでいます。一方、旧制の中学校や実業学校、高等女学校などの生徒は「学徒勤労働員」に駆り出され、原子爆弾の投下当日も約8000人の生徒が戸外での「建物疎開」などに従事していました。

出向のあたりは、  
建物疎開

とほ、9  
説明が  
必要

梶矢さんの姉である小学校3年生の文子さんは、新学期に入り、お母さんの実家があった現在の北広島町へ「縁故疎開」をしていました。しかし、原爆投下前には訳あって自宅に戻っており、弟の文昭文昭くんとともに自宅近くの大須賀分散授業所に通っていました。 もう1つ、6歳の文昭の年齢に「6歳の文昭の年齢に」等

ここからは、皆さんも、いたいけな6歳の児童の心情で体験談を受け止めてもらえればと思います。 前ページで「荒神町小学校」とあるので、「分散授業所」に「通っていたか」

説明が必要

運命の8月6日朝、警戒警報解除の報を受け、きょうだいは爆心地から1.8キロメートルの距離にあった大須賀分散授業所に出向き、朝の掃除に取りかかりました。原子爆弾のさく裂直前、文昭くんは玄関付近に、そして、姉の文子さんはバケツの水換えのため、奥の台所へと向かっていました。そのわずか数秒の家屋内での移動が二人にとっての生死の分かれ目でした。突然、「ピカーツ」の閃光を感じた後、「ドゥーン」という爆風におそわれ、授業所の家屋は一瞬にして倒壊。きょうだいは柱や土壁の下敷きになりました。暗闇と恐怖のなか、しばらく身動きせずに佇んでいた文昭くんは、次第に破れた屋根から外の光が漏れてくると、その方向をめざして死に物狂いで柱や土壁をくぐり抜け、やっと崩れた屋根の上へと這い上がりました。目の前にはすでに被災した人々が列をなして避難しており、文昭くんもその列に加わり、ただただ、夢中で、そとへ瓦礫の道を裸足で逃げたそうです。「自分なりによう逃げたもんじゃと思います」と当時を振り返って話されます。

広島駅の西側付近から饒津神社横の京橋川沿いの道に出た時、川岸には無数の被災者を、そして川面を漂う多くの死体を目の当たりにしました。また、対岸の白島方面には焰が上っていたそうです。見知らぬ大人たちについて懸命に避難を続けた文昭くんは、神社を越えて二葉山の中腹までたどりつきました。そこから見下ろすと広島市内は全面火の海となっていたそうです。

火、

会

夕方になって焰が衰えを見せると、避難していた人々は山を下り始めました。文昭くんも近所のおばさんに連れられて山を下り、家族が生きていれば避難しているであろうと思われる東練兵場（陸軍の演習場）へと向かいました。不安や恐怖のなか、一人になって父や母を探してさまよっていると、近所の別のおばさんに出会い、母たちが避難している場所まで連れて行ってもらいました。やっとのことで再開ができた母の片目にはガラス片が突き刺さり、顔はガラスによる裂傷で血もぐれで、その場にうずくまりながら「うーん、うーん」と呻いていたそうです。その母の前には、今朝、分散授業所で一緒に掃除をしていた姉、文子さんの遺体が横たえられていました。予期せぬ、そして残酷な死にもかかわらず、姉の表情にはかすかな「ほほ笑み」が浮か

お父さん  
お母さん

お母さん

文子さんはなぜ死んだ？

んでいるように、幼~~な~~なかった文昭くんには見えたそうです。その「ほほ笑み」は、梶矢さんご自身の成長の過程において「謎」の一つとして心の中に残り続けたそうです。

易く

お母さん

原爆で大けがを負ったお母さんは気丈にも 94歳まで生き抜かれました。それでも毎年8月6日がやって来ると、お母さんは泣きながら手を合わせて拝んでいたそうです。大人になった梶矢さんは、そんな母の姿を見かねて「ええかげんにしんさい」と叱ったこともあったそうですが、被爆から十数年が経過した頃、お母さんは梶矢さんに姉のことを話してくれました。それは、3年生になった姉が「縁故疎開」で親戚の家に預かってもらっていた時のことでした。お母さんが姉の着替えなどを持って実家を訪ねた際、姉は「私も連れて帰って、連れて帰ってえーや」とお母さんのそばを離れなかったそうです。お母さんは何度も「だめ、だめよ」と言って諭したそうです。何とか姉を説得して母だけを乗せた帰りのバスが走り出すと、姉は懸命にバスを追いかけてきたと言うのです。その必死な姿を見たお母さんは、バスを停めてもらい、姉を迎え入れました。お母さんにすがりついた姉は「うちゃ死んでもええ、死んでもええけんお母さんと一緒にええ」と泣きじゃくったそうです。さすがにお母さんも「ようわかった。死ぬときは一緒に死のうね」と連れて帰ったそうです。バスの中で安心して寝込んだ顔と原爆で死んでいった時の顔が「いっしょじゃった」とお母さんは話してくれたそうです。安全な疎開先から連れて帰ったことで、結果的に娘を死なせてしまったことに対し、お母さんは自分自身を責め、悔い続けていたのです。

木造の住宅内で被爆した人は、爆風・倒壊による圧死や建物の下敷きで身動きが出来ないまま、その後に発生した火災によって焼死する人が多くいました。梶矢さんきょうだいの生死を分けたのは家屋内の居場所だったと先ほど話しましたが、広島市出身の詩人で小説家の原民喜は爆心地から約1.2キロメートルの距離にあった自宅の便所で被爆をしました。また、私の父も同じく爆心地から1.2キロメートル、現在の縮景園付近にあった家の中で被爆し、勝手口の方へ飛ばされた体が、上り口の四角い空間にすっぽりと納まったそうです。すなわち段差があり、比較的狭く、そして多くの柱に支えられた空間（玄関・便所・押し入れ等）にたまたま居たことで、運よく倒壊した家屋から軽傷かつ自力で脱出ができたのではないかと想像できます。

ここで、梶矢文昭さん・原民喜・私の父（大石正文）の被爆体験をもとに、その後のそれぞれの生き方や在り方について少し触れてみたいと思います。もちろん三者に面識はなく、年齢や立場も異なる存在でしたが、京橋川を挟んで比較的近い場所で被爆し、倒壊した家屋から自力で脱出したこと、そして避難ルートやその途上で目の当たりにしたであろう被爆の惨状には重なるところが多くあると思っています。

6歳だった文昭くんは、避難する大人たちの流れに身をまかせるしかありませんで

次ページと重複する部分が多い

少しではない

原民喜、お父さんの話が長く、梶矢さんの話からそれいく印象的

この3人が、比較的早くで被爆し、生還したのは 間違いありませんが、  
このように長く書いても、初めて読む人にはその共通性（は）見出せないため  
あまり効果的ではないように思います。

梶矢さん

したが、下山後は家族に会いたい一心で避難所周辺をさまよい歩き、やっとのことで  
母や姉に再開できたのでした。即死状態だった姉は分散授業所が炎上する前に、父に  
よって連れ出され、重症の母とともに広島東照宮に隣接する東練兵場へ避難していま  
した。梶矢さん家族は、「水を、水をくれ」という断末魔の呻き声が響き、多くの死体  
が横たわる地獄のような東練兵場で数日間を過ごした後、迎えに来てくれた親戚と一  
緒に母の実家へ避難し、しばらくそこで生活することになりました。親戚とはいえ、  
原子爆弾や放射線に関する知識が十分でなかった当時、「原爆症は感染する」といっ  
た偏見などで、納屋にムシロを敷いただけの厳しい生活が続いたそうです。

原民喜

一方、自らの被爆体験を詳細かつ忠実に綴った短編小説「夏の花」の作者である原  
民喜は、40歳のとき、妻の死をきっかけに、空襲にさらされるようになった千葉県か  
ら広島の実家（二人の兄が経営する陸軍御用達の縫製工場）へ疎開（1945年1月31  
日）しました。生きる意欲を失い、居候の身である自分の居場所や人間関係に不安を  
感じる日々を送り、爆心地から1.2キロメートルの自宅内で被爆。自力で脱出した後、  
迫り来る炎を避けながら川土手で一夜を過ごしました。翌日は二葉山の麓にある広島  
東照宮の空き地に避難し、多くの被災者とともにさらに一夜を明かしました。その時  
に被爆の惨状を正確に手帳に記し、「コハ 今後生キノビテ コノ有様ヲツタヘヨト 天  
ノ命ナランカ」と、新たな生への意欲や自身の決意も綴りました。

お父様

そして、私の父は、当時14歳で、広島商業学校（現 広島商業高等学校）の3年生。  
東広島市の実家を離れ、爆心地から約1.2キロメートルの縮景園（浅野泉邸）付近に  
あった叔母宅に下宿をしていました。8月6日の月曜日は工場の電休日にあたり、学  
徒動員先（日本製鋼所）へは行かず、警戒警報が明けた後、いつもより遅い朝食をと  
っていたときに被爆。台所の勝手口に吹き飛ばされましたが、幸い段差のある空間に  
すっぽりと体が納まったことで、頭部の軽い怪我にとどまり、倒壊した家屋から自力  
で脱出をすることができました。戸外にいた叔母は、熱線で背中から手足の裏全体に  
火傷を負い、爆風に吹き飛ばされて頭部に致命的な重傷（8月18日死亡）を負いま  
した。火災による嵐や竜巻が発生するなか、父は重症の叔母らとともに川を渡り、避  
難所の東練兵場を経て約4キロメートル先の親戚宅にたどり着きました。翌日、重症  
の叔母たちとは別れ、一人で矢賀駅まで行き、汽車に乗って7駅先の狩留家駅へ移動。  
そこから、頭部の傷の痛みや不安を抱えながら峠を越え、約10キロメートル先の自  
宅まで歩いて帰りました。

幸いに生き残ることができた三者のその後も付け加えておきたいと思います。

避難先の広島東照宮から兄夫婦とともに佐伯郡八幡村に疎開した原民喜は、その年  
に小説「夏の花」を書きあげましたが、GHQによる検閲を考慮して発表は控えてい  
ました。翌年、再び上京をし、1947（昭和22）年に「夏の花」を文学雑誌に発表。そ

必要か？



原民喜については、割愛してもよいのではないですか。

お父様の被爆体験については、梶矢さんの話の中に挿入するのはなく、  
金本の前の方（もしくは後ろの方）に独立し、まとめて語ることがいいと思います。

の後も旺盛な執筆活動を続けていましたが、1951（昭和26）年に、鉄道線路に身を横たえて自死を遂げます。「コハ 今後生きノビテ コノ有様ヲツタヘヨト 天ノ命ナランカ」との決意の一方で、被爆者として生き続けること、表現者として活動していくこと、また、心身の健康や経済状況にどのような不安や葛藤があったのかはわかりませんが、46歳の若さで自らその生涯を終えてしまいました。それでも、私たちは、残された彼の作品などによって被爆の実相や人としての苦悩に近づくことができます。

一方、戦時体制が強まる中、軍国少年として生きてきた商業学校3年生の父は、実家へ帰宅した後、急性の放射線障害の影響だったのでしょうか、約2週間、高熱と扁桃腺の炎症に苦しみました。それでも、本人曰く、血の塊を吐き出してから、少しずつ健康を回復していきました。卒業後は街中で何か商売をしたいという気持ちを持っていたようですが、農家の後継者という責任を背負って地元にもどり、結婚後、実家で小規模な内装業と運送業の仕事を新たに始めました。健康への不安を払拭するかのごとく、仕事に邁進する日々を過ごしました。自分自身の被爆体験については、何か書き記すとか、筋道をたてて話をするということはほとんど無く、時々、酔いに任せて断片的に経験を語り、「人間の人生はそんなもんじゃないんじゃ」と一方的に愚痴をこぼすぐらいでした。父は2007（平成19）年に肺癌で亡くなり、すでに（18）年が経過しています。伝えてはみたいが、文字や言葉では語れない。できるなら思い出したくない、忘れてしまいたいといった複雑な感情を抱えていたのではないかと思います。また、「被爆者健康手帳」は知り合いの方の勧めで、1969（昭和44）年、38歳の時に取得しますが、どこか後ろめたい気持ちを持っていたように私には思えました。

さて、被爆体験証言者である梶矢さんのその後ですが、避難先の母の実家から広島市内へもどり、バラック小屋からの再出発となりました。再開した小学校はいわゆる「青空学級」で、進学した中学校には未だ校舎は無く、遠方の中学校への通学を余儀なくされたそうです。梶矢家は経済的には苦しい状況だったそうですが、ご両親やきょうだいの支えによって高校・大学へと進学し、1952（昭和37）年に小学校の教員になりました。1990年代の中ごろまでは、教師として被爆体験を語ることはあまりなかったそうですが、校長となられた1994年頃から、自らの被爆体験を語る機会が少しずつ増えていったそうです。小学校の低学年にも関心を持たせるために自ら絵を描いて、紙芝居風にして伝えるような工夫や改善を重ねて来られました。また、退職後は「ヒロシマを語り継ぐ教師の会」を組織し、伝承活動を継続的に取り組んで来られました。さらに、2020年から広島平和文化センターの被爆体験証言者となられ、自ら証言活動を続けられるとともに被爆体験伝承者の養成にも力を尽くしておられます。

12,512

色々とお話をしてきましたが、人にはそれぞれ独自の生き方なり方そして考え方が  
あるように、被爆体験者にもそれぞれの思いや苦悩、そして願いがあります。

最後に「ヒロシマをつなぐ」というテーマでお話をさせていただきます。梶矢さん  
はいつも被爆証言の最後に「三度目は許しちゃいけないのです」「平和は尊いぞ」と強く  
訴えられます。「広島・長崎に続く原爆投下は絶対にあってはならない」との思いこそ  
が、梶矢さん自身の証言活動そして伝承者の養成活動を支えておられます。現在、世  
界には (12,520) 発の核弾頭が存在し、実践配備数は (3,804) 発といわれています。  
また、水素爆弾が主流となった核兵器の威力は最大で広島型原爆の約 1000 倍ともい  
われ、半径 2 キロメートル内を壊滅させた原子爆弾は今や、一・二発で日本全体を焦  
土と化す威力を有しているといえます。それゆえ、「使えない核兵器」といった幻想的  
な核抑止論が支配的でしたが、2022 年のロシア・ウクライナ紛争や 2023 年のイスラ  
エル・パレスチナ (ハマス) 紛争以降、劣化ウラン弾の使用とともに「使える核兵器」  
(戦術核・戦略核・小型核等) の議論が散見されるようになりました。核兵器禁止条  
約発効 (2021 年) の一方で、最近の核兵器をめぐる国際情勢は極めて憂慮しなければ  
ならない状況にあるといえます。

子どもに  
伝わるか?

頻発する国家や民族対立によって、核兵器廃絶への道は政治的に困難を極めていま  
すが、あらためて私たちは、(79) 年前に「きのこ雲」の下にあった被爆の実相に深く  
学び、原爆投下に至ってしまった歴史やその背景を正しく知ること。さらに、被爆体  
験者の願いを聴き、受け止め、それらを多様な方法で持続的に継承する営みこそが最  
も強力な抑止力であること、また一般市民を巻き添えにする戦争や武  
力での衝突に勝者などはないということをけっして忘れてはならないと思います。  
そして、微力ではあっても私たちにできることを行動に移していくことが、被爆者の  
願いやその「声なき声」にも応えていくことになると思います。

何を  
意味する?

最後になりましたが、私たちの現在や未来は、天災や自然の猛威に無力な面もあり、  
時に「運命」として受け入れなければならないこともあるのかもしれませんが、しかし、  
核兵器の開発・保有・使用、またその前提としての戦争や武力対立は「運命」ではな  
く「人為」であり「人災」なのです。絶対に避けねばなりませんし、避けることはで  
きるはずです。

以上で私からのお話は終了させていただきます。何か質問や疑問がありましたらお  
願いします。

本日は被爆体験伝承講話にご参加いただきありがとうございました。

梶矢さんの話の印象が薄い。

「17歳の6歳の子ども、心情」を表現するには、具体的な場面描写で、心理描写が必要は

全体的に、いろいろな話が散見し、用語も難解なので、「小学6年生も相手に話可」と想定し、  
易い表現を、心掛けた方がよい。 [ ] をつけたものは言葉換えや説明が必要。

単純計算は  
子どもに  
伝わるか?